

スポーツ系大学院における人脈形成の重要性 —早稲田大学大学院社会人修士課程に着目して—

健康スポーツマネジメントコース
5017A328-1 横山 亜衣

研究指導教員：中村 好男 教授

I. 緒言

大学院の整備、拡充は長年にわたって高等教育政策の重要課題とされてきた。戦後、新制大学になって大学院の設置が旧帝国大学以外でも可能となったが、研究者や大学教員を養成する機関として考えられており、高度職業人を養成するための場所ではなかった。しかし、1974 年の大学院設置基準の制定によって、「修士課程は、広い視野に立って精深な学識を授け、専攻分野における研究能力又はこれに加えて高度の専門性が求められる職業を担うための卓越した能力を培うことを目的とする」とされ、その後、1990 年代以降、政府が中心となって様々な改革が進められて来た。

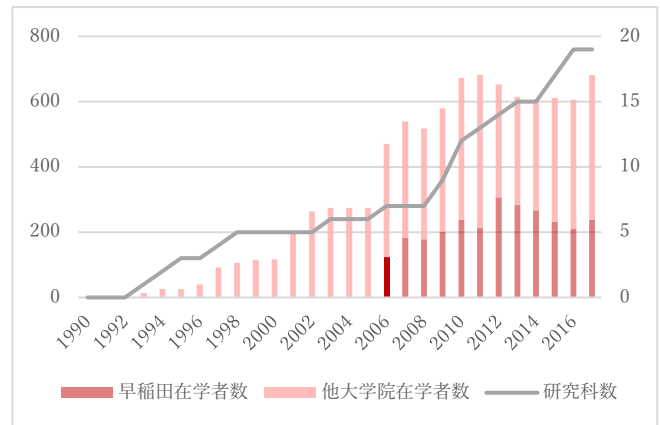
修士課程入学者数は、1990 年 30,733 人から 2017 年 73,411 人と増加した。そのうち、社会人入学者数は、647 人から 7,842 人、社会人が全体に占める割合は 5.4%から 10.7%と増加した。結果的に、大学院のエリート時代は去り、大衆化時代が到来したと言える。

「スポーツ」を名称に含む研究科（以下、スポーツ系大学院）は、1993 年の日本女子体育大学に始まり、2006 年には早稲田大学大学院人間科学研究科がスポーツ科学研究科に名称変更がされた。さらに名称変更と同時に、健康・スポーツ分野の専門家を対象とした社会人修士課程 1 年制も設立された。

それまでゆるやかに増加していたスポーツ系大学院だったが、早稲田大学大学院スポーツ科学研究科（以下、早稲田スポ研）が設立された 2006 年度以降、続々と設置されはじめ、現在ではスポーツ系大学院に体育を専門とする大学院を加えると、27 校まで増加した。

さらに、早稲田スポ研は、現在スポーツ系大学院の中では最も多い院生数を誇る。2017 年度在学者数計 681 名のうち早稲田スポ研が 238 名であり、全体の 1/3 を占めている。

2006 年度以降のスポーツ系大学院研究科設置状況や院生数から見ても、早稲田スポ研は、スポーツ系大学院の牽引的存在として今日に至るといっても過言ではない。早稲田スポ研がスポーツ系大学院に変革をもたらしてきたことは「WASEDA Effect 2006」と名づけることができるのではないだろうか。



II. 問題の所在と目的

古村(2014)によると「(早稲田スポ研社会人修士は)人脈作りに利用されている面があると私は考える。」と述べられているが、早稲田スポ研の人脈形成について、在学生のアンケートデータを用いた検証はされていない。

そこで、早稲田スポ研がスポーツ系大学院の牽引的存在となっていること、および社会人修士課程に著名人を含めスポーツ界関係者が集まることのひとつの要因として、早稲田スポ研の特徴かつ魅力が「人脈」にあるのではないかと考え、検証することを目的とした。

III. 方法

日本国内における、体育・スポーツを専門とする大学院修士課程在学生へのWEBアンケート調査を行った。

27 大学院の中から 21 大学院へ、下記の方法によりアンケート調査協力を依頼した。10 大学院（在学生 602 名）が協力に応じてくれ、87 名の回答があった。（回答率 16. 4%）

そのうち、アンケート回答に大学院名の回答記載あったのは、9 大学院（在学生 576 名）の 75 名であった。75 名を以下の 4 群に分けるため、早稲田大学大学院 2 年制修士課程在学生（キャリア経験あり）2 名を本論文の分析では、除外することとする。よって、73 名の回答結果を用いて分析を行った。

【実施期間】

2017 年 10 月 24 日～2017 年 11 月 12 日

2017 年 11 月 25 日～2017 年 12 月 1 日

【調査方法】

Google フォームを使用した WEB 上のアンケート調査

群	大学名	在籍過程	キャリア経験	n
A群	早稲田	1年制	あり	22
B群	早稲田	2年制	なし	10
C群	他大学	-	あり	9
D群	他大学	-	なし	32
合計				73

【分析対象項目および手法】

- ・5段階（選択肢1～5）の回答については、中央値を基準として、2分割し分析することとした。
- ・統計分析手法は、 χ^2 検定を行った。
- ・以下の群間において比較を行った。
 - 大学間比較：A群とC群
 - 早稲田間比較：A群とB群
 - キャリアあり間比較：A群とC群
 - キャリアなし間比較：B群とD群
- ・「人的ネットワーク」の回答について、各群の平均値を算出した。

IV. 結果

【結果1】

各群間において χ^2 検定を行ったところ、A群とC群の間には多くの有意差が認められ、他群間においても、いくつかの有意差が認められた。

本研究で着目する「人的ネットワークが広がったと感じている」の結果は以下のとおりである。

- (1) A群とC群に有意差が認められた。(** $p<0.01$)
- (2) A群とB群の間に有意差は認められなかった。
($p=0.47$)
- (3) A群とC群の間に有意差は認められなかった。
($p=0.12$)
- (4) B群とD群の間に有意差が認められた。(** $p<0.01$)

【結果2】

「人的ネットワークが広がったと感じている」の回答平均値は、高い順から、A群：4.59、安田(2013)：4.33、B群：4.3、小方(2005)：3.73、C群：3.6、D群：3.56であった。

V. 考察

早稲田スポ研全体の特徴として「人的ネットワークが広がった」と感じている院生が多いという結果が得られた。

回答平均値は、A群が最も高く、かつ先行研究の他機関よりも高いことが明らかとなった。さらに、A群のみならず、B群においても、安田(2013)の研究と同等の結果を示しており、早稲田スポ研全体として、高い回答結果を示した。

筆者が名付けた2006年度の「WASEDA Effect 2006」から、日本国内にはスポーツ系大学院が續々と設置され、学生数も増加した。現在、最も多い学生数を誇り、牽引的存在となってきた早稲田スポ研の事例から、大学院では専門知識の学びに加えて、人脈形成は重要な要素であることが示唆された。また、社会人修士課程では著名人を含め、スポーツ界で活躍する入学者が集まることも、人脈が形成される環境があるひとつの結果といえるのではないだろうか。

安田(2013)が「起こっている問題を、一般化して考え(幅広い視野を持つ)、その問題に対する事例やデータを集めて分析し(情報を集約し分析する力)、多くの人の協力を経て改革に繋げていく(人的ネットワーク形成)」と言うことが今後の大学に必要であると仮定すれば、大学院はその能力を涵養する機関として、大きな役割があることになる。」と述べているように、大学院での人的ネットワーク形成は、在学中および卒業後の生活や職業において非常に重要な役割を果たし、その後のあらゆる可能性と選択肢を広げてくれるといえる。

VI. 結論

1. 「人的ネットワークが広がった」と感じている院生は「早稲田スポ研全体に多い」という結果が得られた。
2. 他機関を対象とした先行研究と比較しても、「人的ネットワークが広がった」と感じている回答平均値は、早稲田スポ研社会人修士が最も高いことが明らかとなった。

以上のことから、早稲田スポ研がスポーツ系大学院の牽引的存在となっていること、および社会人修士課程に著名人を含めスポーツ界関係者が集まることのひとつの要因として、「人脈形成」があることが示唆された。

以上